

「英語文章を読む」とは何だろうか

—授業現場からの報告—

藤 本 幸 伸

「英語文章を読む」という営みを授業の中でどのように動機づければよいのかを念頭に置きながら様々な工夫を凝らして授業を行ってきた。その過程で明らかになってきたのは、教員の側で明確に「英語文章を読む」ことの目的を提示しておかなければ学生は戸惑うばかりだということ、また、仮に教員がその目的を明示しても学生側に相応の動機がなければ十分な指導も難しいということであった。

そこで、まず、分かったようで分からない「英語文章を読む」ことの目的をはっきりさせ、次に、この「英語文章を読む」行為を実践する幾つかの方法を比較検討し、最後に、英語文章の読解を指導する上で有効であると思われる方法を実際の英語文章で検証する、という手順で以下話を進めてみたい。

1. 「英語文章を読む」とは何なのか

一般的に言って、ある問題を設定しそれを解決しようとする場合、問題設定の仕方自体が解決策を限定してしまうということが往々にして起こる。「英語文章を読む」とは何なのかという問いの場合も、問題の立て方如何でその解決の方向が決まってしまうことになる。

例えば、「英語文章を読むとは何か」とした場合、〈何をどのように何の目的で〉読むのかといったように読みの〈対象・方法・目的〉が問題点として浮上してくるし、「英語文章を理解するとは何か」とすれば、〈何をどこまで〉理解すれば理解したと言えるのか、読みの〈対象〉と〈深さ〉に焦点が集まるし、更に、「英語文章が分かるとは何か」になると、〈何がどの状態になったとき〉分かったと言えるのかという、読みの〈対象〉と分かったと言えるときの〈心理〉を明らかにしなければならなくなる。

このように「英語文章を読む」とは何かを問おうとすれば、その問題設定によって解決の方策も自ずと決まってしまう、読解を指導する際にどこに焦点を当てるのか、どのように動機付けをするのかも自ずと異なってくる。しかし、どのような問題設定をしても読解において常に問題となるのは、読みの〈対象〉であることには変わりはない。そこで、この読みの〈対象〉についてこれまで話題になってきた点を整理してみたい。

英文解釈における解釈とは何か、解釈するとは何か、この問いに答えるのはかなりの難問であると言う安井稔の考えを、少し長くなるが以下に引用しておこう。

手元の辞書を参照しながら、結論だけを言うと、「英文を解釈する」というのは、「英文の意味・内容を理解し、説明する」ということである。それなら、「理解する」というのは、どういうことであろうか。辞書を見ると、「意味を理解する」というのは、「意味がわかる」ということであり、「わかる」を引くと、「理解する」とあり、ここで、ぐるぐる回りになってしまう。

もう少しなんとか言い様はないものであろうか。そう思って探してみると、「納得する」、「ふに落ちる」などの言い方が得られる。これをもう少し突っ込んだ形で言うとする、「わかる」というのは、「自分の知識や体験の総体の中のしかるべきところに、新しく与えられた情報を位置づけること」、もっと言えば、「新しい情報を自分の中へ吸収し、自分の知識や体験の総体に、期待されていると考えられる変容を加えること」というようなことになるであろう。平たく言えば、「わかる」というのは、「ああそうか、なるほど」と思うことである。

けれども、「なるほどそうかと思う」といっても、その「思い方」は、各人各様、千差万別でありうる。となると、わかっているかいなかを正確にテストすることは、不可能ではないかと思われてくる。(『納得のいく英文解釈』 p.2)

どうだろうか。解釈とは何かを巡って苦渋の滲み出た文章であるが、結論として「わかる」というのは「ああそうか、なるほど」と思うことである、というのであれば、この結論自体が「ぐるぐる回り」しているようであり、解釈とは何かを明らかにするのは「不可能」にすら思えてくる。

ここでもう一人、中学・高校・大学の学生たちの英文読解の悲惨とも言える実態を憂慮する天満美智子が「読解」をどう捉えているかを見ておこう。

読解とは、「文字で書かれたテキストを読むことを通して、書き手の意図する意味内容を理解すること」である。いま少し詳しく述べるならば、まず、書き手(作者、著者など)が存在する。書き手は、ある目標、目的をもち、それにあわせて、対象となる読み手のモデルを想定したうえで、文の形や構造をきめて、テキストを作成する。つまり、書き手は自分の意図する意味内容をテキストに盛り込む。さて、一方に読み手が存在する。読み手は自分の既有的言語知識(語彙、統語、意味)に加えて、常識的知識、それに自分の関心、目的、書き手に対する想定モデル等をもってテキストに対処する。読み手は、書き手の言いなりになる単なる受動的な読解者ではない。積極的にテキストに働きかけて、意味内容を構

築する行動者である。つまり、書き手と読み手は、テキストをはさんでダイナミックな相互活動をなすのである。（『英文読解のストラテジー』 pp. 8-9）

ローマン・ヤコブソン流のコミュニケーションモデルを下敷きにしたこの「読解」は書き手と読み手の対話を重視するという点で、安井の一方通行的な「解釈」の考え方より優れているとは言える。しかし、またぞろ「書き手の意図する意味内容」という掴み所のない概念が持ち出され、結局「読解」とは何か、「読解」で何がわかるのか（何を理解するのか）、どこまで分かれば分かったと言えるのかは曖昧なままである。

ここで「英語文章を読む」ことを巡っての問題点を整理しておこう。この「英語文章を読む」ことを巡る問題点は、読みの〈目的・方法・対象・深さ〉に絞り込めると言っていいただろう。まず、読みの〈対象・深さ〉について若干の問題点を見ておこう。

「英語文章を読む」というときの読みの〈対象〉を、天満は「書き手の意図する意味内容」とした。言い換えれば、この「書き手の意図する意味内容」を捉えることができた時点で、天満にとっての「読解」は一応終了することになる。だが、改めて自分が読み取ったと思う意味内容が「書き手の意図する意味内容」と本当に一致しているのかを確認しようとすると、どうやって一致しているかを確かめればよいのか判断の基準が曖昧になる。確認するためには、対象となる英語文章のどこかに「書き手の意図する意味内容」なるものが存在しなければならない。しかし、この「書き手の意図する意味内容」そのものが読み手が「積極的にテキストに働きかけて」構築した「意味内容」であるとすれば、読み手が読み取ったと（自分勝手に）思う意味内容ならば何でも「書き手の意図する意味内容」だと言うことになり、結局「書き手の意図する意味内容」というものは曖昧なままであろう。結局、「書き手の意図する意味内容」と自分の読み取ったとする意味内容との確認作業は無限後退にも似た無益な作業になってしまうだろう。

また、読みの〈深さ〉についても同じような困難がある。ある一つの文章を複数の人、A、B、C、Dさんが読んだとする。その時、この4人の読みの〈深さ〉を判定する基準はなんだろうか。恐らく、先ほど問題にした「書き手の意図する意味内容」が基準となるのであろうが、この基準自体が読み取った人の個人的に構築した「読解」でしかないとすると、読みの〈深さ〉は比べようもないことになる。つまり、AさんはBさんよりもこの文章をよく理解しているとは言えなくなる。このように見てくると、「英語文章を読む（理解する、分かる）」というときの理解する〈対象〉と理解の〈深さ〉にはいつも曖昧さ（不確定要素）が残ることになる。

このような曖昧さは回避できないものだろうか。先ほど「英語文章を読む」こと

を巡る問題点を、読みの〈目的・方法・対象・深さ〉というポイントに絞り込んでおいた。このポイントの中の〈目的〉を明確にすることで「英語文章を読む」ことを巡る曖昧さを回避できるだろう。つまり、「英語文章を読む」目的を明確にすれば、自ずとその目的に応じた英語文章の読み方の〈方法・対象・深さ〉も決まってくるはずだ。

そこで、ここでの読みの〈目的〉を「新しい情報・知識を得るため、もしくは、既存の知識を確認補強するため」としておこう。そうすると、読みの〈対象・深さ〉、つまり、〈何をどこまで理解すればよいのか〉の判断基準は、「新しい情報・知識の獲得、あるいは、既存の知識の確認・補強」という目的を満たした時点で一応終了とすることになる。〈方法〉についてもこの目的を果たすための最適な方法とは何かを考えればよいことになる。次節では、具体例を挙げながら英語文章の読み方の〈方法・対象・深さ〉について考えてみたい。

2. 「英語文章を読む」ための〈方法〉：語彙・文法・構造の把握重視の方法とパラグラフ構成重視の方法

ひとまず次の英語文章を読んでみよう。

The modern garden has a history going back many thousands of years. Early humans were hunters and gatherers, and didn't usually stay in one place for a long time. Instead, they traveled from place to place following the food (plants and animals) according to the seasons. During the Neolithic period (over 10,000 years ago) this slowly began to change; humans started to domesticate certain plants, which meant they could remain in one place and grow their own food. The first "garden" was a vegetable garden, where early humans cultivated different types of plants for food. (*Do You Know This?* Lesson 12)

今日の庭園がどういう経緯で出来たのかを述べた文章である。このような文章を理解させる指導法として、従来から行われてきた語彙・文法・構造の把握を最優先する読み方 (Bottom-up) と最近定着した感のあるパラグラフ構成を重視した読み方 (Top-down) がある。以下で、「新しい情報・知識を得るため、もしくは、既存の知識を確認補強するため」を英語文章を読む目的とした場合に、この二つの読みの方法はどれだけ有効なのかを検討してみたい¹⁾。

まず、語彙・文法・構造の把握を重視する読み方で問題となるのは、語彙もしくは文法の理解が英語文章の理解にどのように貢献するのかという点である。上の文

章を例にとると、「初期人類は移動しながら食料を確保する生活を送っていたが、新石器時代に境に植物を栽培する定住生活に変わった。これが今日の庭園の始まりである」という知識が得られれば、この文章理解の作業は一応終了する。この庭園事始めの知識が得られてもなお、語彙・文法・構造の把握が必要であるのか、また、この知識の獲得に語彙・文法・構造の把握がどのように役立つのかを明確にしておかなければ、英語文章理解のための方法であったはずの語彙・文法・構造の把握は自己目的化しかねない。（ここで問題となるのは、文章理解の目的とその方法である語彙・文法・構造の把握の深さとの関係である。従来は文章理解の目的が達成されてもなお語彙・文法・構造の把握を徒に求めて、焦点が本来の「読解」から「語彙・文法・構造の把握」へと移ってしまい、読解指導が「語彙・文法・構造」の指導にすり替わっていたと言って良いのではないか。）

今、この方法の自己目的化を上の記事で例証しておきたい。この文章の中に分詞構文と非制限用法の関係詞が目立つ文法項目として入っている。語彙としては *begin* と *start* に後続する不定詞、他動詞用法の *grow*, *mean* の用法などがある。ところで、上記の文章を読んで庭園事始めという知識が得られた場合、ここで挙げた文法や語彙の把握は殊更必要なのであろうか。言い換えれば、この文法や語彙が把握できていなければ、たとえ庭園事始めの知識が得られたとしても理解としては不十分なのだろうか。あるいは、この文章を読んで知識を得るという目的を満たしていなくてもこの文法や語彙の把握が充分であれば、その者の方がより理解があるのだろうか。更に言えば、“the modern garden” の *the* の用法や “stay in one place” と “traveled from place to place” に見られる *place* の冠詞の用法についてより深い把握のある者の方が、語彙・文法の把握が浅い者や一部の語彙・文法の把握しかない者よりも文章理解の点でも優れていると言えるのだろうか。

ここで簡単に結論を言ってしまうえば、英語文章理解の目的を満たすという観点からすると語彙・文法・構造の把握は必須ではない。確かに、“started to domesticate certain plants” を「ある植物を栽培するために始めた」と理解したり、“The modern garden has a history going back many thousands of years” を「今日の庭園は何千年も帰って行きながら歴史を持つ」という不思議な日本語にしたりする場合は、語彙・文法・構造の理解は必須となる。しかし、このような初歩的な語彙・文法・構造の習得は、語彙・文法・構造の学習で行えばよいのであって、読みの指導の中心をしめる必要はないはずである。

start to do と *start doing* の違いについての知識、関係詞の制限・非制限用法の違いとそれに伴う訳し分けや分詞構文の細かな用法説明が、「新しい情報・知識を得るため、もしくは、既存の知識を確認補強するため」という英語文章理解の目的に貢献しないのであれば、読みの指導においては必要ではないであろう。（但し、A

mean B は「Aが原因となってBという結果になる」を意味し因果関係を示す働きがあるという語彙指導は、英語文章を理解する際に語彙面の負担を軽減するという意味では有効であるだろう。) いずれにせよ、「新しい情報・知識を得るため、もしくは、既存の知識を確認補強するため」という英語文章理解の目的に貢献しない語彙・文法・構造の把握は読みの指導において必要ではないのである。

次に、パラグラフ構成を重視した読みの指導について若干の問題点を指摘しておきたい。

Getting older does not mean losing one's ability to learn. Children are wonders at increasing their vocabularies because of a powerful urge to learn. They do not learn solely by means of words, but a larger vocabulary gives them access to increased knowledge — words are, after all, symbols of ideas and understanding. Adults who lose this urge stop building their vocabularies. They stop learning; they stop growing intellectually; they stop changing. Fortunately, this process is far from irreversible. (『TOEFL テスト速読・速聴大特訓基礎編』p 82)

このパラグラフ構成重視の読解でも、トピックセンテンス (Topic Sentence) 探しの自己目的化が問題となる。この文章でのTPはどれだろうか。更には、このTPを支えるサポーティングセンテンス (Supporting Sentences) はどれとどれであろうか。こう考えてくると、何のためのTPもしくはSPなのか疑問になる。あくまでも文章を読む目的は「新しい情報・知識を得るため、もしくは、既存の知識を確認補強するため」なのであるから、この目的を達成できればその文章は理解できたと言えるはずである。それなのに文章読解の目的をさておいてTPやSP探しに始終するのは文章読解の目的からすると本末転倒であるとすら言える。

では、具体的にこの文章でTPやSPを探してみよう。まず、TPであるが第1文の“Getting older does not mean losing one's ability to learn.”が候補として挙がる。しかし、最後の文“Fortunately, this process is far from irreversible.”も何やら気になる。この文が気になり始めると、“this process”が何を指すのかをはっきりさせなければこの文がTPの一部になるのかもしれないのか判断も付きかねる。このようにして、徐々に本来の「情報の獲得・知識の再確認」という目的を見失い、TPやSP探しに没頭することになる。

このような事態を果たして文章を読んでいると言えるだろうか。先ほどの語彙・文法・構造の把握を重視する読み方にしても、このパラグラフ構成を重視した読み方にしても、ある文章を読んで「情報の獲得・知識の再確認」という目的を迅速的確に達成するための手段・方法であるはずだ。であるにもかかわらず、手段・方法

であるはずの語彙・文法・構造の把握や TP・SP 探しが自己目的化してしまう。この事態は文章読解としては避けねばならないことであろう。

そこで、次節でこの二つの方法に変わる読み方を提示してみたい。

3. 「英語文章を読む」ための〈方法〉：言い換え表現に注目する読み方

先に読みの〈目的〉を「新しい情報・知識を得るため、もしくは、既存の知識を確認補強するため」としておいた。読みの目的をこのように設定すると、自ずとこの目的に応じた英語文章の読み方の〈対象と深さ〉、つまり、〈何をどこまで理解すればよいのか〉の判断基準も決まってくることも述べておいた。(言うまでもないことだが、読みはあくまでも「情報の獲得・知識の再確認」の達成が目的であり、この目的を満たす限りにおいて英語表現や文章構成に関して踏み込まないことが前提である。) ここで改めて〈何をどこまで理解すればよいのか=対象と深さ〉を明確にしておきたい。

まず以て「何故に文章を書くのか」という今までとは逆の視点からこの〈対象と深さ〉を眺めると、読み手が〈何か〉を伝えたいからだということになる。この〈何か〉が読みの〈対象〉となるのは間違いない。次に、〈どこまで理解すればよいのか〉であるが、これも逆発想して「(理解したと思う何かのうち)最低限どの程度まで他人に伝えなければその相手は分かってもらえないのか」と言い換えると、相手にとっての分かり易さが一つの基準となるだろう。このように考えると、文章には伝えたい相手に分かりやすく伝えようとする工夫・仕掛けが必ず含まれているはずだし、この工夫・仕掛けを逆手に取ることで容易にその文章は〈読む〉ことが出来るはずである。以下では、この〈相手にとっての分かり易さ〉と〈分かり易く伝える工夫・仕掛け〉をひとまず確定して、それから具体例で確認しておこう。

〈相手にとっての分かり易さ〉は、(気恥ずかしくなるほど新鮮味に欠けるが)「誰がどうした、なぜか」ということに尽きる(これに場合によって、「いつどこで」が加わることもある)。文章中同一内容をいくつもの異なる言い回して表現していく言い換え表現が〈分かり易く伝える工夫・仕掛け〉に相当する²⁾。まとめると、言い換え表現に注目しながら「誰がどうした、なぜか」を理解すれば、その時点で「新しい情報・知識を得る、もしくは、既存の知識を確認補強する」ことを目的とした読みは終了すると言えるはずである。では、具体例で確認しておこう。

Samples of pollen are collected in special traps which are mounted on the roof at 32 sites across the United Kingdom. Julie Tidmarsh of the National Pollen Research Unit in Worcester explains: "Each trap sucks in air at a steady rate. The pollen grains are captured on a rotating sticky tape inside, which is automati-

cally replaced every two hours. At nine o'clock each morning the tapes are put under the microscope to read the average pollen count for the previous 24 hours, measured in grass pollen grains per cubic meter of air."

This year's pollen count has been particularly high — record-breaking in some areas — because of the warm, wet spring, which provided ideal conditions for grasses to thrive.

(Do You Know This? Lesson 9)

この文章を言い換え表現に注目して図式化してみよう。

Samples of pollen are collected in special traps.

Each trap sucks in air at a steady rate.

The pollen grains are captured on a rotating sticky tape inside...

the tapes are put under the microscope

to **read the average pollen count** for the previous 24 hours, measured in **grass pollen grains** per cubic meter of air."

This year's pollen count has been particularly high

— record-breaking in some areas —

because of the warm, wet spring, which provided ideal conditions for grasses to thrive.

このように言い換え表現に注目して図式化すると、主語の位置に“Samples of pollen, The pollen grains”という表現が並び、述部に“are collected in special traps, Each trap, are captured on a rotating sticky tape inside, the tapes”という表現が揃うことになる。ここに挙げた表現が言い方は異なるが同じ内容を指していると分かれば、「花粉が特別な装置で集められる（花粉を特別な装置で集める）」とまとめることもさほど困難ではないだろう。

そして更に、この内容が“**This year's pollen count**”という表現で言い換えられて次のパラグラフで展開されていき、「今年の花粉の量」が“**particularly high, record-breaking**”，つまり、「特に多い，記録的である」となっていく。これで「何がどうした」が理解でき、後は「なぜ」に当たるところを読み取れば、この英語文章の読みは終了することになる（ここでは「なぜ」に当たる箇所は“because of”以下で明示的に示されているので理解しやすいはずである）。この英語文章の読みは、「今年の花粉の量は特に多い，記録的である，なぜなら春が暖かく湿っていたので雑草

が育つのに絶好であったから」と理解できた時点で完了する。

このような方法にも当然問題点はある。言い換え表現に慣れていないと、どこどこが言い換えの関係に当たるのかを判別しにくい。しかし、先ほども述べたように、言い換え表現は伝えたい相手に分かりやすく伝えようとする工夫・仕掛けであるから、この仕掛けに慣れれば〈読み〉の絶好の手がかりとなるはずである。しかも、言い換え表現は、同じ語句の反復や同系列の表現（類義語など）で構成されるので、思ったほどの困難は感じられないはずである。このような問題点はあるにせよ、言い換え表現に注目する読み方は、本来の〈読み〉に向けさせる一つの方法として有効であるはずである³⁾。

以上が「英語文章を読む」の指導に悩みながら行ってきた授業でのささやかな工夫である。本来の〈読み〉の指導に向けたより汎用性の高い方法を見いだすにはまだ至っていないが、ここで提示した言い換え表現に注目する〈読み〉の方法は「新しい情報・知識の獲得、もしくは、既存の知識の確認補強」という目的を満たすには最適の方法の一つであるだろう。

注

- 1) ここでは、この2つの代表的な読解指導法について不十分な扱いしか出来ていない。「語彙・文法・構造の把握を最優先する読み方」を吟味するに当たっては、その代表例である数多くの英文読解参考書にあたり問題点を指摘すべきであるが、その余裕は今はない。また、最近様々な工夫を凝らした参考書が出版されている「パラグラフ構成を重視した読み方」についても、その方法が緻密になればなるほど〈読む〉ことよりも「読みの方法」についての説明に重点が移る傾向にある。本文でも挙げておいたように、容易にTPが見つからない英文は多い。これに対処するために、Implied Topic Sentence という項目でこの隠されたTPを見つける練習をさせる参考書まである（例えば、*Ten Steps to Improving College Reading Skills* や *Basic Skills for Effective Reading* など）。
- 2) 誠に新鮮味に欠ける内容で恐縮ですらあるが、書き手側からの発想を活用した〈読む〉ことの工夫については、古くは Stephen Toulmin の *The Uses of Argument* がある。この「トゥールミンモデル」は、最近多くの文章・論文の書き方本などで参照され流行にもなっている。日本では、福沢一吉『議論のレッスン』や香西秀信『議論速成法』などがそれにあたり、アメリカの大学で教科書として使われている *A Rhetoric of Argument* もそうである。「トゥールミンモデル」とは、粗雑な言い方だが、ある主張 (claim) には必ず根拠 (reason) が伴うが、更に自分の主張に説得力を持たせようとする、この「主張と根拠」との橋渡しとなるべき論拠 (warrant) を明示することが必要だ、というものである。最後の英文例で

言えば、主張が「今年の花粉は例年になく多かった」にあたり、根拠が「暖かく湿った春であったから」となる。なぜ春が暖かく湿っていると花粉の数が増えるのかの橋渡し役の論拠になるのが、「(暖かく湿った春が) 雑草が育つのに絶好の条件となったから」の部分ということになる。

- 3) これまで言い換え表現に注目した英文読解の参考書がなかったわけではない。残念なことに、極軽く触れるだけにとどまり、具体的な指導にまで至っていない。言い換え表現に触れている参考書としては、古くは原仙作の『英文標準問題精講』(sequence word として紹介されている)があり、新しいところでは成田あゆみ・日比野克哉『ディスコースマーカー英文読解』(Fook という用語でパラグラフ構成の図解とともに出てくる)がある。アメリカでは小学校レベルの作文用教科書や注1で挙げた大学用の作文教科書などで若干言い換え表現を指摘させる練習問題が取り上げられている。

参考文献

- アルク TOEFL 研究会 『TOEFL テスト速読・速聴大特訓基礎編』 アルク 1999年
 岡野圭壺 他 *Do you Know This?* 朝日出版社 2005年
 香西秀信 『議論速成法』 ちくま新書 2000年
 天満美智子 『英文読解のストラテジー』 大修館書店 1989年
 成田あゆみ・日比野克哉 『ディスコースマーカー英文読解―大意把握から要約まで』 Z会出版 2003年
 原 仙作 『英文標準問題精講』 5訂版 旺文社 1999年
 福澤一吉 『議論のレッスン』 NHK出版 2002年
 安井 稔 『納得のいく英文解釈』 開拓社 1995年
 Fahnestock, Jeanne. *A Rhetoric of Argument*. 3rd Ed. Mcgrow-Hill, 2003.
 Langan, John. *Ten Steps to Improving College Reading Skills*. 3rd Ed. Townsend Press, 1997.
 Priestly, Michael. *24 Nonfiction Passages for Test Practice*. Scholastic Professional Book, 2002.
 Shiras, Rosemary and Susan Smith. *Paragraphs Writing Made Easy!* Scholastic Professional Book, 2001.
 Toulmin, Stephen. *The Uses of Argument*. Updated Edition Cambridge University Press, 2003.
 Wilf, Selma. *Basic Skills for Effective Reading*. 4th Ed. Prentice Hall, 1998.
 Wolfe, Robin. *Scholastic Success With Reading Comprehension*. Scholastic Professional Book, 2003.